

### 1 UR リンケージの海外業務の経緯

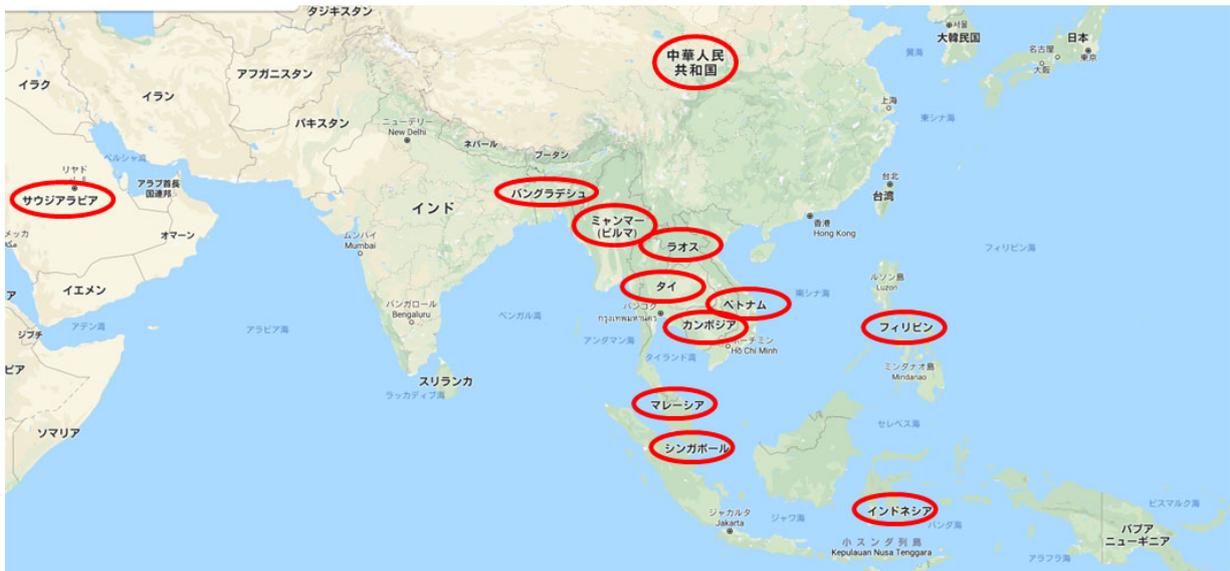
UR リンケージは、これまで、建設コンサルタント企業として、日本全国を対象に都市計画・都市開発事業に従事してきました。2020年現在、UR リンケージには、東北から九州を拠点に約 1,800 名の職員が働いております。この中で、海外業務を専門職員は、10 名です。

私が入社した 2013 年以來、UR リンケージは海外業務に参画しました。ASEAN 諸国や中国を対象に、国土交通省による日本のインフラ輸出やIT/FI計画、日系企業の海外展開促進などの調査や計画策定を実施しました。

2017 年には、「海外プロジェクト推進課」が設置され、JICA による新興国政府への技術支援、日本の都市開発の優位性等の情報発信、海外政府職員の訪日研修対応を実施してきました。

今年、2020 年には、「海外プロジェクト推進室」を発足しました。日本政府の ODA によるバングラデシュのダッカ地下鉄整備事業にも参画しております。

本稿では、UR リンケージの近年の業務を紹介します。



■UR リンケージの海外業務実績国



■UR リンケージの海外業務事例：都市開発パイロットプロジェクトの検討（現地視察/MP 作成）

## 2 カンボジア・プノンペンにおける業務

20人乗りのバスをチャーターし、フェリーでメコン川を横断し、ドキドキハラハラしたのは、2019年9月、初めてカンボジアのプノンペンを訪れた時でした。

タイの隣国カンボジアは、寺院を始めとする伝統的建築の様式や言語、また街中で見かける市民の顔立ち等は、バンコクと雰囲気が似ています。首都プノンペンは、バンコクに比べて経済的な発展は劣るものの、近年、中国資本による不動産開発が進行し、中心部にはハイクラスの高層マンションが立ち並び、街中の看板や建物の表示には漢字が目立ちます。

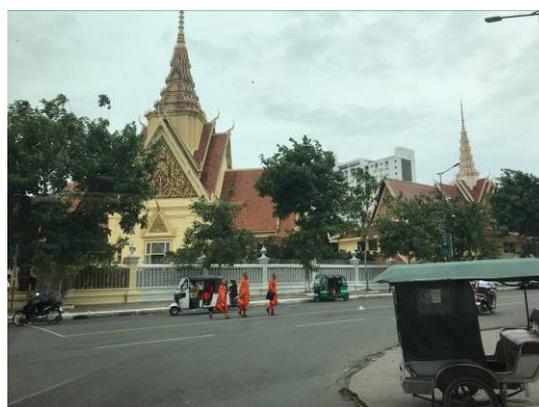
URリンケージは、2019年以降、国土交通省の業務において、プノンペンの都市開発分野における日系企業を主体とした都市開発事業組成の調査を実施しています。2019年、カンボジア政府と日本の国土交通省による、プノンペンの良好な都市開発に向けたMoUの締結を契機に、カンボジア政府からそのモデルプロジェクトなる開発サイトと土地所有者（現地デベロッパー）の紹介を受けて、10数以上のサイトの現地視察や土地所有者との面談を実施してきました。

プノンペン中心部は都市開発が進行し、新たな開発地がほぼありません。そのため、本プロジェクトでは、カンボジアと日系の民間企業らとともに、郊外部における都市開発事業の案件の検討を進めています。

プノンペンの郊外部では、日本のイオンモールの進出や、新たな国際空港の建設、幹線道路の整備、メコン川を横断する橋の建設計画が進んでおり、今後の発展が期待されます。無秩序な都市開発にならぬよう、日・カンボジアの共同プロジェクトが今後のプノンペンの良好なモデルとなるように、今年度も検討を進めています。



■プノンペンの中心部とメコン川



■プノンペンにある寺院



■橋の少ないメコン川を渡るフェリー



■プノンペンのイオンモール2号店

### 3 ミャンマー・ヤンゴンにおける業務

昔の日本のJR車両が今もヤンゴン市民に利用され、感動と面映ゆさを覚えたのは、私が初めてミャンマーを訪れた、2017年6月です。当時私はURリンテージから日本工営に出向社員として在籍し、所属部のプロジェクト支援として、ヤンゴンを訪問しました。カンボジア同様、仏教国であるミャンマーは日本人である私にとって馴染みやすい国です。

2011年のミャンマーの民政化以降、同国最大都市であるヤンゴンは、急速な都市・経済の発展を遂げています。これは、日本や中国、韓国、その他欧米諸国による都市インフラや法制度整備の支援によるものが大きいと言えます。

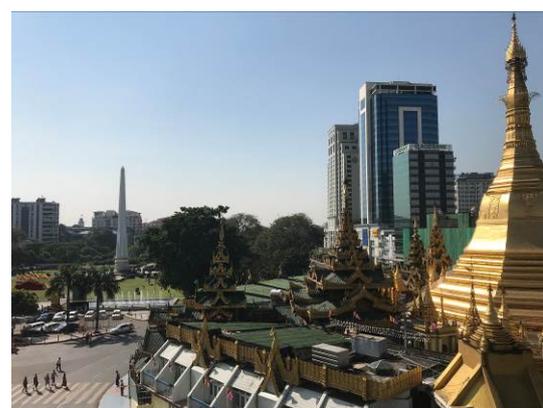
2020年、日本工営と実施している国土交通省の業務では、ヤンゴンのスマートシティのマスタープランの作成を目指しています。これには、日本企業が有するスマート関連の技術・ソリューションをヤンゴンが抱える都市課題の解決策として適用し、それらを優先プロジェクトとして位置付けることを狙いとしています。ヤンゴンのスマートシティ構築のために、日本の民間企業の当プロジェクトの関心も高く、今後、日本企業の技術輸出とともに、ヤンゴンのスマート化に期待ができます。

一方、ヤンゴン市も独自に、スマートシティの構築に向けて、デジタル技術を活用した市民や事業者向けの様々なスマートサービスを進めています。

建築許可申請等のオンライン化、スマートフォンを利用した公共バスの運賃支払い、交差点モニタリングによる交通管制システムの構築等、他国支援の元、ヤンゴン市が現地企業の技術を導入しています。本プロジェクトでも、更なる都市サービスの構築を後押ししたいと思います。



■日本のJR車両が走るヤンゴン環状線



■スレーパゴダとマハバンドゥーラ公園



■市民の憩いの場、マハバンドゥーラ公園



■ヤンゴン市が取り組むスマートサービス

#### 4 バングラデシュ・ダッカにおける業務

「I respect Japan!」。そう声かけられたのは、私が初めてバングラデシュの首都ダッカを訪れた2019年4月のダッカ国際空港の職員からでした。バングラデシュがパキスタンから独立宣言した1970年代に、国際社会の中で、日本が早期にそれを認めたことにより、バングラ国民は親日感情を持っているようです。

2016年の無差別テロ以降、ダッカの治安は国際的に懸念されてきており、私のダッカ出張も外出禁止でした。現地駐在の職員によれば、2016年以降は安全だそうです。

ダッカは、最貧国の首都、世界最悪の人口密度、といった印象があると思いますが、中心部は比較的発展を遂げており、現在は、国際空港の拡張や、ダッカ北部と東部において大規模な都市開発が進められており、今後の成長に期待が寄せられています。

現在、ダッカでは日本政府やその他国際機関の資金援助により、6路線の鉄道整備事業が進められています。その中の5号線事業は、日本のODAによるもので、受注者である日本工営の体制として、URリンクージュも参画しております。

当プロジェクトは単なる鉄道整備事業だけではなく、鉄道駅に付帯するバスターミナルや商業施設の計画等も含まれており、URリンクージュはこれらの担当として、日本のTOD型都市開発の知見を活かしながら、検討を進めています。

今年度のコロナの状況の中、安全を確保しつつ、プロジェクトメンバーの初回渡航を無事に終えました。現地での3年間というロングタームのプロジェクトなので、単なる机上調査・可能性調査ではなく、実際に鉄道が完成する地に足のついたプロジェクトです。まさにURリンクージュの現場力が発揮され、将来ダッカ市民が鉄道を利用することを想像すると、完成が楽しみです。



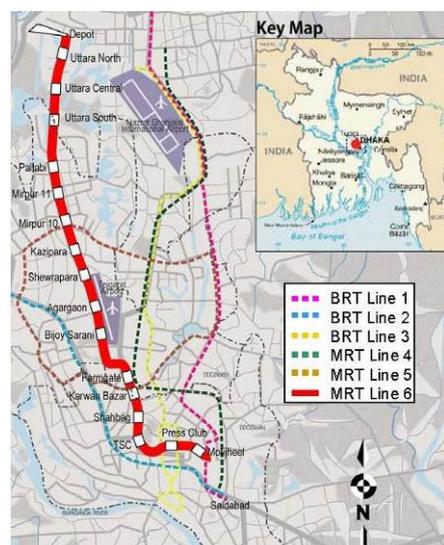
■ダッカ中心部（幹線道路）のようす



■ダッカ郊外で進む住宅開発



■ダッカ中心部（一般道路）のようす



■ダッカで進む鉄道整備事業6路線

## 5 おわりに

本稿では、本年度のURリンケージの代表的な業務である、プノンペン、ヤンゴン、ダッカの取組みを紹介しました。URリンケージが海外業務に取り組み始め当初は、中国はベトナム等を主たる対象としてきましたが、私が海外業務に取り組んできたこの4年間において社会・経済状況は変わり、上記3国のような新興国において、日本政府が支援するプロジェクトが増えています。海外業務は全世界が対象ですので、常に同じ国・都市だけを対象に業務を行うのではなく、その時代時代によって、困っている国・都市を発見し、そこに対し適切な支援を行っていくことを心掛けていきたいと思えます。



■ヤンゴンの風景